

結婚 10 年そして、新たな挑戦 —多くの力を借りて生きる—

第 1 期 OB 井川 倫士

こんにちは。毎度おなじみ 1 期の問題児、井川です。6 年ぶりにこのゼミの寄稿文を書いています。今年
は締切りにギリギリ間に合いましたよ。近況報告、最近心掛けていること、野望、そして自分への戒めと
メッセージを送りたいと思います。

◆42 歳の近況報告：結婚生活と変化

2022 年 1 月 5 日。入籍して早 10 年が過ぎた。その間に、独立・起業、実家の茨城県銚田市に U ターン。
その半年後には市議会議員に立候補し、現在 2 期目を迎えている。文字にすれば、怒涛の 10 年だった。だ
からこそ、この 10 年に付き合ってくれている妻には、世の既婚男性の多くのように頭が上がらない。いや
私の場合は、それ以上だろう。今の奥さんでなければ、もう結婚してくれる人は見つかりそうにない。

プライベートでは娘と息子の子ども 2 人に恵まれて、先程も触れた何事も明るく捉える妻との 4 人暮らし。
昨年の 1 月に実父を亡くし、いよいよ名実ともに一家の主となった。田舎では珍しいが、次男である
私が家を継がなければいけないのかも知れない。いつもの自分と違い、ハッキリさせないことに努力して
いる。歳を重ねて、そういうことも出来るようになったのだ。

◆ここ数年の命題：「なぜ人生の先輩からのアドバイスが役に立たない、間違った答えであるのか？」

皆さんも自分の中で、いくつかの命題、とはいかないまでも「いくつかの答えの出ない問い—例えば、
郷土の暮らし—」を抱えながら生きていると思う。ようやくこの中の 1 つに結論を付けられそうだ。6 年前
に立てた 3 つの仮説。

仮説 1：時代が違うので今の時代にマッチしないから

仮説 2：噂話が独り歩きしていて、実際にその人が体験、経験したことではないから

仮説 3：そもそも噂話が、ある一定の力のある人にとって都合の良いように操作されているから

結論を言えば、この茨城県銚田市という人口 5 万人弱の自治体のようなどころでは、仮説 1 が答えだっ
た。つまり先輩たちの意見は、日本の人口が普通に増える時代で、スマホはおろかパソコンもインターネ
ットも無い時代での常識に基づいたものだから役に立たないのだ。もちろん、リアルな交流も大切なのは
分かっている。江戸時代の参勤交代は幕府に強制された莫大な費用の掛かる藩の事業であったが、一方で、
江戸に集まる様々な物や情報を仕入れる絶好の機会でもあった。若者たちにとっては、特に魅力的で刺激

的な機会であり、武士としての成長と人間性の研磨も担っていたはずだ。我らが福澤先生の例もあるが。

だからむしろ、好奇心に対する焦点の幅の狭さという表現があっているのかも知れない。多くのことに疑問を持たず、疑問を持ったとしても自分で情報を調べて、自分で答えを出すという習慣が薄いのだ。それでも生きていける時代であったし、そんなことをする必要もそもそも無かったからだ。

歴史は繰り返す。印刷技術の発展や蒸気機関の開発など、たくさんのイノベーションによって時代が変革していく過程があった。その前後で当然に常識は塗り替えられて来た。そんな当たり前の答えに、人生42年を過ぎてようやく腑に落ちたのだった。

と先日、父親の一周忌の食事の際に、兄からタモリさんの言葉を聴かされる。「40歳になったら年下の意見を聞いたほうがいい。40歳から上の人は聞く必要ない」というもの。どうもこれは、東野幸治さんのエッセイの中に出てきた言葉のようだ。エッセイの中のニュアンスとは違うようだが、とてもしっくりくる。

若い者の発言権の乏しい議会だからこそ、一般人には想像出来ないお粗末な議論や漫画の喜劇にしか見えない出来事が普通に起きるのだ。

◆人口過疎よりも情報過疎の課題クリアが最重要の時代へ

「人生の先輩からのアドバイスが役に立たない」状況は、銚田市のような田舎の場合はより顕著だ。この理由は、新しい常識に触れる機会の少なさからだ。いくつかの要因があるが、1つは人口の少なさだ。人口が少ないということは域内の交流が少なく、新しい情報に触れる機会も少ない。他方で一部の人が情報を握り、その人の常識がまるで世の中の常識であるかのような錯覚を起こしている場合が多い。

2つ目は地理的な要因だ。銚田市は東側が海に面している。また西側には霞ヶ浦（北浦）、北側は涸沼という2つの湖に囲まれている。このような立地のため他地域との交流が起きにくい。交流・関係人口が地理的な要因から少なく、市民も職員も、そして議員も他自治体の情報が少ないことにより、競争が緩慢だ。

3つ目はITリテラシーの低さだ。上記の1と2の理由は、この情報化社会の中では本来それほど遅れを取ることに繋がらないはずである。しかしながら、田舎はそもそもITリテラシーが低く、情報に触れる頻度の少なさを感じる。特にコロナ禍による都心部との行き来の減少と、会議等のオンライン化に付いていけなかった地方都市にとっては、情報過疎の加速化が更に進んだように感じる。

人口減少のスピードは今や自然減で毎年50万人以上だ。これは人口約290万人の茨城県が6年で無くなる計算だ。銚田市では人口減少のスピードは更に速く、10年で約45,000人の人口の10分の1が居なくなる予測となっている。田舎の人口過疎は避けられそうにない。だからこそパラダイムシフトが起きる時代に、情報過疎は地域の生き死にを左右する事態になりかねない。これからの10年の課題は、人口減少による経済規模の縮小という課題と同様に、この情報過疎がいよいよ最重要課題となるだろう。

◆次の命題：「古くて役に立たない先輩は、後輩たちに何が出来るのか」

そしてまた私を悩ませる別の命題が浮かび上がってくる。それが上記の命題だ。もう「上の人たちのせ

いで、こんな世の中になっているのだ…」という言い訳が出来ない責任世代に私もなってしまったのだ。

後輩たちにとって、役に立たなくなってしまった自分に何が出来るのだろうか。そう考えた時に自分のいる政治の世界、それこそ古めかしい世代が跋扈している世界で出来ることを考えるようになっていく。この世界では、先程の「仮説3：そもそも噂話が、ある一定の力のある人にとって都合の良いように操作されているから」ということが普通の世界なのだ。なぜなら、政治家の多くは、3つのことにしか興味が無いからだ。それは①自分の選挙のこと、②自分の敵のこと、③自分の権威を示すことの3つだ。この全てにとって仮説3が大事であり、この政治の世界ほど「間違った噂話に支配されている世界」は無いのだ。

常識が常識で無い世界。だからこそ、市議会議員2期目で最年少である自分が、この政治の世界の本当のことを暴き、新たな仮説を検証していく必要がある…はずだ。

◆自分への戒めとメッセージ：12月の茨城県議会選挙へ

次の世代のために道を切り開いていきたいと考え、今年の12月に行われる県議選に挑戦する決意をした。市議会議員という立場では出来ないことをやりたい。教育、医療・観光や世界を見据えた農業振興など提案・実践したいことがたくさんある。コロナ対応は、周知のように都道府県の権限が大きい。それにも関わらず科学的知見に基づいた対策が、ほとんど為されていない。教育委員会は市町村ごとに独立した存在であるはずだが、責任を持ちたくない教育委員会は国や都道府県からの指示・方向性を待っている。観光や世界を見据えた農業振興は、1つの市町村自治体でやるような時代は終わった。広域的な課題解決のためにも、改めて県議の大切さを痛感し、市議会議員としての限界を感じたのだ。

しかし県議会議員選挙に臨む上での問題がある。県議選に挑戦するための資金が足りないのだ。なぜなら最低500万、可能なら1,000万円の資金が必要だからだ。ここで皆さんにお願いしたい。「寄附をお願いします！振込先は、下に書いてあります。これはマジのお願いなのでよろしくお願いします（笑）」

一方、「寄附するメリットは何だ。」と言えば、倫士版ふるさと納税だ。銚田市や茨城県の特産物、メロン、苺、干し芋・焼き芋などを年に数回送らせてもらう（有権者でなければ違法ではない）。もちろん銚田市や茨城県全体での行政上の取引窓口となることもお約束する。と結局、相変わらずな私なのだ。

選挙で私は900人以上の方にフルネームを書いてもらい当選している（井川という候補が2名いるため）。よくよく考えればこれは凄いことだ。なぜなら滅多に他人の名前をフルネームで書くことは無いからだ。この人たちの期待に応えたい。県議に当選するためには、少なくとも更に10,000人以上の方に名前を書いてもらわなければ当選出来ない。この実現に大事なことは、全て人と人との繋がりだ。これから人口が少なくなっていく時代だからこそ、人と人との繋がり大切さがより一層重要になってくるのだろう。



2年前の家族写真



リボンアートフェスティバルの様子



政治家用 HP

寄附先：井川ともり後援会
常陽銀行銚田支店（普）1517244